「狂気な倫理」書評　逸脱した思想に場所与える学問

評者:藤野裕子 / 朝日新聞掲載:2022 年 11 月 19 日

本書のいう「狂気」とは、世間一般では「愚か」「不可解」「無価値」と見なされる生に、「意味」を見出(みいだ)す営みのことだと定義されている。収録された13の論考は、生命・性・家族・障害・病などを扱い、ともすれば規範や常識によって無意味とされてしまう生を肯定しようと試みる。

児童虐待の世代を超えた連鎖について扱った論考は、連鎖を恐れて人工妊娠中絶を受けた女性と向き合う。「普通の家族」を希求し、胎児を無化したくないという強い思いを持つ女性もいることを示し、世代間連鎖を強調する言説・制度の問題性を指摘する。

1950年代に雑誌「奇譚(きたん)クラブ」上で展開された、サディストとマゾヒストとの対話に着目した章も興味深い。暴力と愛を区別するマゾヒストの倫理が、今日一般的に重要視される同意や対等性とは異なるものであったことを示唆する。

大阪の釜ヶ崎・飛田における異性装や同性愛のありようをあきらかにした章は、同地域に対するこれまでの関心が異性愛に集中してきたことを鋭く指摘する。

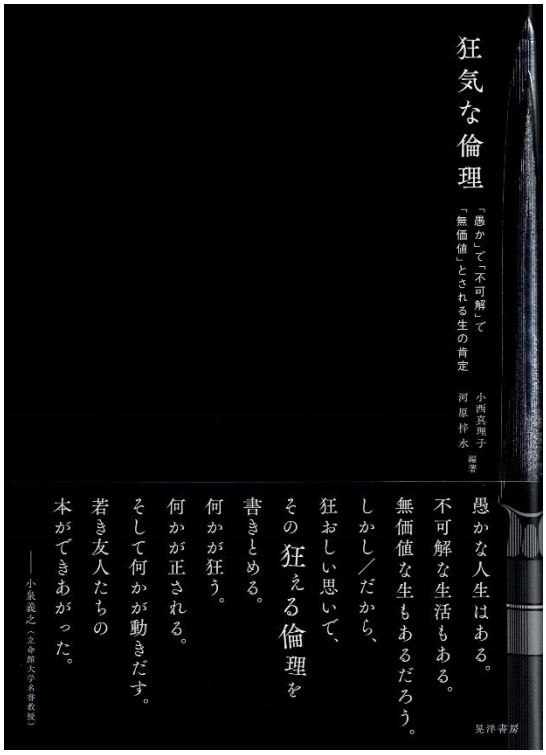
本書は、インタビュー調査・雑誌・漫画・アニメの分析など、多様な研究手法で「狂気」とされる生にアプローチし、学術論文の形式で表現する。それは、学問が常識から逸脱した思想・物言いに対し、武器や場所を与えうるという信念に基づく。加えて、その学問こそが、対象とすべき生を価値付け、序列化している現状への、異議申し立てであるようにも思う。

規範や通念に抗(あらが)うがゆえに、各章は必然的に論争的な要素を含む。本書を読みながら、異論や違和感が湧き上がるかもしれない。しかしその議論を頭ごなしに否定することも、反対に、その重要性をあらかじめ知っていたかのように読み流すことも、適切ではないだろう。自らの違和感を認め、それが何に由来するかを自問し、認識枠組みを問い直す。本書はそうした読み方を読者に求めている。

◇

こにし・まりこ　大阪大学准教授。著書に『共依存の倫理』▽かわはら・あずみ　福岡女子大講師

(https://book.asahi.com/article/14771648)



狂気な倫理　「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定

編者:小西真理子・河原梓水(国際教養学科・准教授)

発行所:晃洋書房　発行日:2022 年 8 月30日

定価:2970 円(A5・310 ページ)

ISBN:978-4-7710-3655-0

―内容―

まえがき(小西真理子)

第Ⅰ部　「愚か」な生を肯定する——家族論再考

第1章　「不幸」の再生産——世代間連鎖という思想の闇(小西真理子)

第2章　「カサンドラ現象」論——それぞれに「異質」な私たちの間に橋を架けること(髙木美歩)

第3章　ケア倫理における家族に関するスケッチ——「つながっていない者」へのケアに向けて(秋葉峻介)

第4章　「私の親は毒親です」——アダルトチルドレンの回復論の外側を生きる当事者を肯定する(高倉久有・小西真理子)

第5章　生み捨てられる社会へ(貞岡美伸)

第Ⅱ部　「不可解」な生を肯定する——周縁からのまなざし

第6章　狂気、あるいはマゾヒストの愛について——一九五〇年代『奇譚クラブ』における「女性のマゾヒズム」論を読む(河原梓水)

第7章　戦後釜ヶ崎の周縁的セクシュアリティ(鹿野由行・石田仁)

第8章　ひきこもりから無縁の倫理、あるいは野生の倫理へ(小田切建太郎)

第9章　動物と植物と微生物のあいだ——『妖怪人間ベム』があらわす反包摂の技法(山本由美子)

第Ⅲ部　「無価値」な生を肯定する——障害と優生思想

第 10 章　看護再考——〈大人〉たちへのアンチテーゼ(柏﨑郁子)

第 11 章　パラリンピック選手の抵抗の可能性と「別の生」(北島加奈子)

第 12 章　脳・身体・音声言語——「正常/異常」の区別を越えて(田邉健太郎)

第 13 章　今いる子どもと未来の子どもをめぐる光と闇——先天性代謝異常等検査と出生前診断のもたらすもの(笹谷絵里)

あとがき(河原梓水)